

瀬戸内町立図書館・郷土館

紀 要

第8号

1	1
奄美大島南部におけるゴホウラ資料 —表面採集状況及び若干の考察—	14
冊 丈太郎	14
25	25
36	36
(81)	(81)
(23)	(23)
(22)	(22)
(18)	(18)
(13)	(13)
(4)	(4)
(1)	(1)

2013

瀬戸内町立図書館・郷土館

奄美大島南部におけるゴホウラ資料

～表面採集状況及び若干の考察～

瀬戸内町立図書館・郷土館 鼎 丈太郎

はじめに

四方を海に囲まれた島嶼地域である南西諸島では、サンゴ礁やイノーで簡単に捕獲できる貝類を食料資源として、古くから利用してきた。これら貝類は、食料資源としての価値だけでなく、北部九州を中心に南海産大型巻貝を使用した貝製品が流行すると、交易品としても重要な資源となった。これら南西諸島と九州を中心に行われていた貝の交易については「貝の道」としてよく知られており、弥生時代にまでさかのぼることが出来る。この貝の交易では、とりわけゴホウラ・イモガイ・ヤコウガイ・ホラガイ等が利用されてきた。これらの貝類は、奄美群島以南でしか生息しておらず、古代の人々がいかにこの貝類に魅せられていたかが理解できる。

現在でも、奄美群島では、これらの貝類が生息しているのだが、ヤコウガイを除くと日常生活でお目にかかることは殆どない。しかし、奄美大島南部、特に加計呂麻島では、家々の門柱上で廊下であるスジガイやクモガイに混じり、ゴホウラを見かけることがある(写真1)。また、遺跡調査の基本である表面採集調査でも、少なからず、ゴホウラを採集することが出来る。そこで、本稿では、こうした奄美大島南部におけるゴホウラ資料の意味合いについて、若干の考察を行ってみたいと思う。

1 奄美大島南部(瀬戸内町)の地形

奄美大島は、鹿児島市から約380 km、沖縄本島から約350 kmとほぼ中間に位置している。南西諸島の中でも山岳地が多く、奄美大島南部では総面積の約87%が山林で占められている。ほとんどの集落が深い入江に面した狭い平野に立地しており、海に面していない三方は300～400 mの山岳地が連なりながら急傾斜となって海岸や集落へと達している。海岸線は、典型的なリアス式海岸を形成し、水深の深い入江が多く、水産業や避難港として利用されている(写真2)。



写真1 門柱上のゴホウラ(加計呂麻島 生間集落)



写真2 航空写真(加計呂麻島東側)

II 奄美大島南部（瀬戸内町）の遺跡分布状況

これまで、奄美大島での遺跡分布は、奄美大島北部に遺跡が集中する傾向が見られていた。表1のグラフを見ていただくとわかるが、殆どの遺跡が旧名瀬市以北に集中しているのが確認できる。特に時代が古いほど、その傾向が高いように見える。このデータを基に考察を行うと、古代より古い時代は、奄美大島の南部に人々は、殆ど住んでいなかったことになる。

平成15（2003）年から、瀬戸内町では、町内の遺跡分布調査を実施している。調査成果をまとめてみると、前述の傾向に反し、瀬戸内町内にも数多くの遺跡が存在することが確認できた（表2）。瀬戸内町での各時代の遺跡数の割合は、旧笠利町とは相違するが、旧名瀬市とはほぼ同じ割合を示した。このことは、地形の影響が少なからず考えられ、おそらく旧笠利町の東海岸が古代以前の人々が住みやすい環境であったからだと考えられる。そして、同様な地形である瀬戸内町と旧名瀬市が、各時代の遺跡の割合も類似したのだと考えられる。

では、なぜ表1のような偏ったデータとなったのか。遺跡数の多い旧笠利町及び旧名瀬市は、埋蔵文化財専門職員が常駐しており、その他の地域は、埋蔵文化財の専門職員がいなかったことが原因だと考えられる。こうした、調査体制も含め検討を行わないと、人々の生活復元や遺跡の性格が相違したものになる可能性がある。

各地区における時代ごとの遺跡数

	縄文	弥生・古墳	古代	中世
瀬戸内地区	3	0	0	18
宇佐地区	0	0	0	5
大和地区	0	0	0	4
住用地区	1	1	0	2
名瀬地区	4	4	13	63
龍郷地区	5	7	1	4
笠利地区	15	14	22	17

埋蔵文化財情報データベース（鹿児島県埋蔵文化財センターより）

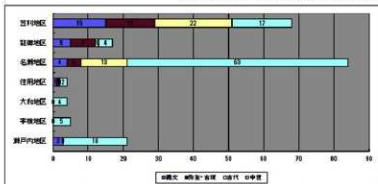


表1 奄美大島各地区の各時代ごとの遺跡数①

表1 奄美大島各地区の各時代ごとの遺跡数①

各地区における時代ごとの遺跡数

	縄文	弥生・古墳	古代	中世
瀬戸内地区	5	7	11	49
宇佐地区	0	0	0	5
大和地区	0	0	0	4
住用地区	1	1	0	2
名瀬地区	4	4	13	63
龍郷地区	5	7	1	4
笠利地区	15	14	22	17

※瀬戸内地区は、分岐調査による埋蔵文化財情報データベース（鹿児島県埋蔵文化財センターより）

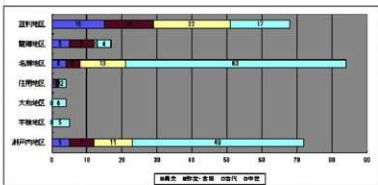


表2 奄美大島各地区の各時代ごとの遺跡数②

それでは、瀬戸内町全体の遺跡分布であるが、第1図 瀬戸内町遺跡分布図に記載のとおりである。現在までに確認された遺跡・遺物散布地は52ヶ所であり、分布図を概観してみると、遺跡が瀬戸内町全域に分布している事が解る。

そこで、遺跡の分布が時代ごとにどのように変化するのか、縄文時代から近世までを4期に分け、各時代における遺跡の分布・立地傾向を確認してみたい。

1. 縄文時代相当期

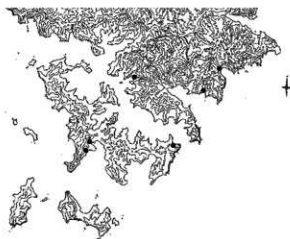
縄文時代相当期の遺跡は、瀬戸内町の東部外洋側に分布し、河川付近の山裾に存在する沖積低地及び古砂砂丘上に形成される傾向がある(第2図)。縄文時代相当期では、狩猟・採集を中心に生活を行っていた。そのため、遺跡の立地条件として、山や海、河川・泉に近い土地であることが条件であったと考えられる。新砂丘は形成されていないか形成途中であると考えられ、山裾の狭い台地・平野を居住空間に選択したのではないかと考えられる。

2. 弥生時代～古墳時代相当期

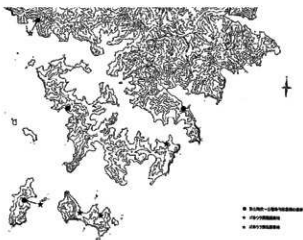
日本列島では、稲作が本格的に開始された時期である。この時代の遺跡は、7箇所確認されている(第3図)。遺跡の分布を概観してみると、請島・与路島の両島にも遺跡が確認されるようになり、瀬戸内町の東側に偏るといった傾向はみられない。しかし、大島海峡内部に遺跡が分布しない点では、縄文時代相当期と同様の傾向である。ゴホウラなど大型巻貝の出土が目される。



第1図 瀬戸内町遺跡分布図



第2図 縄文時代相当期の遺跡分布



第3図 弥生時代～古墳時代相当期の遺跡分布

3. 飛鳥時代～平安時代前期相当期

文献史学の成果によると、南西諸島の島々や物産が文献に多く登場し、九州などとの交流が伺える時期である。しかし、在地土器の特徴は、南九州の特徴よりも在地的特徴が強くなり、沖縄諸島の土器様相と再び類似するようになる。この時期の遺跡は、11箇所確認されており、兼久式土器やヤコウガイなどが確認されている（第4図）。当該時期は、遺跡の近辺で干潮層にリーフ（瀬）が出る地域が大半であり、リーフは、遺跡形成の条件の一つである可能性が高い。そのため、皆津崎のような狭い土地でも遺跡が存在したのだと考えられる。

なお、この時期も外洋側に遺跡が形成される傾向がみられる。



第4図 飛鳥時代～平安時代前期相当期の遺跡分布

4. 平安時代後期～江戸時代相当期

日本列島では、国家領域が現在と変わらないほど広大になり、沖縄諸島では琉球国が成立、国家の体制が整う時期である。奄美群島では、在地土器が殆ど使用されなくなり、カムイヤキや陶磁器など大量生産された焼物が流通・使用され始める。琉球諸島の稲作は、この頃に開始されたと考えられている。奄美群島では、この時期を出土遺物から、カムイヤキの盛行する時期、琉球国統治の時期、薩摩藩統治の時期の3期に細分することが可能であるが、細分された各時期の遺跡分布や立地は、ほぼ同地点に存在している。

よって、今回は、この時期を南西諸島における国家成立の時期と捉え、細分を行わず同時期として考えることとする。この時期の遺跡は、47箇所確認されている（第5図）。遺跡の分布を概観してみると、外洋側だけでなく大島海峽内にも遺跡跡が形成され、現在の集落とほぼ重複するようになる。遺跡の立地も有力者や祭祀空間に遺物が集中するなど、現在の集落空間と遺跡が密接にリンクしている傾向も見受けられる。



第5図 平安時代後期～江戸時代相当期の遺跡分布

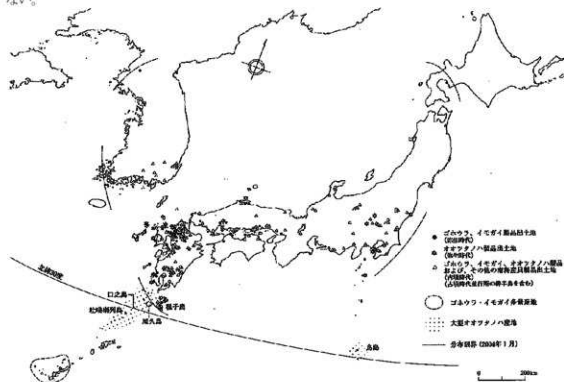
以上、各時期の遺跡分布を概観してみたが、遺跡の形成には時期ごとに一定の条件が存在し、その条件に見合う地域を人々が選択していたことが解る。また、人々が現在の集落とほぼ変わらない地域に住み始めるのは、遺跡の分布状況から平安時代後期～江戸時代相当期であると推測できる。

III ゴホウラの遠隔地交易

前節で、奄美大島南部（瀬戸内町）の遺跡分布状況を概観してみた。近年まで奄美大島南部地域では、縄文時代相当期もしくは中世の遺跡しか確認されていなかったが、発掘調査や表面採集調査など調査成果が増えたことにより、弥生時代から平安時代に相当する時期の遺跡も次々と確認されるようになった。こうした分布調査の中で、調査前の予想に反して多く採集・確認されたのが、ゴホウラ資料である。これら採集資料の検討は後述するとして、まずはゴホウラの遠隔地交易について先行研究より概括してみたい。

先述したとおり、ゴホウラは南西諸島と九州を中心に行われていた貝の交易「貝の道」で交易品として利用されていた貝の一つである。古くは弥生時代までさかのぼることができ、北部九州を中心に貝製腕輪の材料として利用されてきた。こうした腕輪の存在は、戦前から認識されていたが、貝種については不明の状態が続いていた。1969年、当時九州大学医学部の教授であった水井昌文氏が腕輪の製作実験を繰り返し、腕輪の材料が南西諸島以南でしか採取できないゴホウラであることを突き止めた。このことを契機として、貝製腕輪の研究は飛躍的に進展することになる。

その後、供給地である南西諸島の遺跡調査も進展し、ゴホウラやイモガイの貝集積遺構も確認された。現在までに、九州以北で確認された南海産貝輪は100遺跡600個以上に上り、沖縄諸島のゴホウラ・イモガイの貝集積遺構も30遺跡100基以上が確認されている。貝集積遺構は、貝種や加工にバリエーションがあり、死貝も確認されている。これらの死貝は、ヤドカリによる運搬や漂着などで採集できることから、水深の深い海に生息するゴホウラを容易に得ることが出来る手段として利用されてきたと考えられている。なお、奄美群島では、現在までに貝集積遺構は確認されていない。



第6図 南海産貝製品の出土地と素材貝類の産地（弥生～古墳時代） ※木下尚子氏作成 1)

また、沖縄諸島の貝集積遺構では、搬入遺物や出土土器・墓制などから分析・検討が行われ、交易の拠点集落と分枝集落の存在や、弥生時代の前半と後半での交易の違いなどが示された。なお、拠点集落の不明瞭な奄美群島は、ゴホウラを得にくい環境であり、貝を運搬する役割を担うことになったとされ、そのことを裏付けるように、弥生時代中期以降、沖縄諸島への奄美系土器の増加、九州系弥生土器の減少が確認できると指摘されている。

以上、ゴホウラの遠隔地交易について研究状況を概括してみた。その特徴をまとめてみると、①弥生時代、北部九州と南西諸島の間で貝の遠隔交易が開始される。②沖縄諸島で貝集積遺構が確認されている。奄美群島では、確認されていない。③貝集積遺構は、貝種や加工にバリエーションがあり、死貝も利用されている。④沖縄諸島では、弥生時代前半、九州系弥生土器が搬入品として存在し、墓制などから、交易の拠点集落と分枝集落が存在する。⑤弥生時代中期以降、沖縄諸島で出土する搬入土器の多くは奄美系土器であり、奄美群島の人々が中継交易を行っている可能性がある。

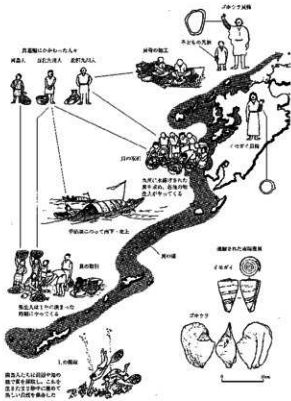
などがポイントとしてあげられる。ゴホウラの交易の中で各地域の需要と供給のバランス、それに関わる人々の役割分担、システム化。そして、それに伴う変化について徐々に明らかになりつつあるのが理解できる。

IV 奄美大島南部における表面採集のゴホウラ資料について

ゴホウラの交易について概観を行ってみたが、ゴホウラの貝集積遺構は沖縄諸島でしか発見されていないことが確認できた。それでは、瀬戸内海で数多く表面採集されたゴホウラ資料について状況を確認してみたい。

1. 表面採集資料

瀬戸内海におけるゴホウラの表面採集資料は、9ヶ所28点であり(第8図)、ほぼ全ての資料が何らかの加工を受けている。また、西古見の資料は、ゴホウラ貝輪を二

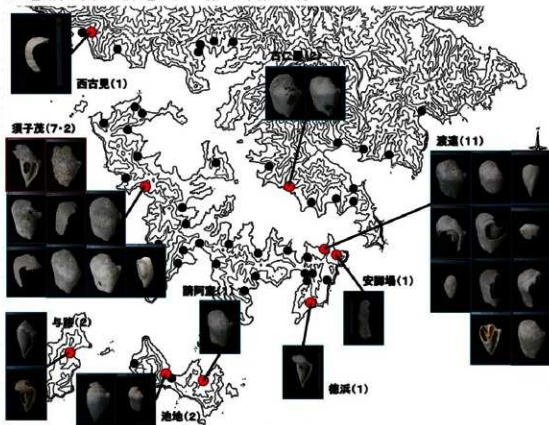


第7図 「貝の道」模式図 松木下尚子氏作成 2)



写真3 表面採集ゴホウラ資料 (渡連集落)

次加工した資料（写真7）である。古仁屋と西古見集落で表面採集された3点を除くと、全ての資料が加計呂麻島、請島、与路島の資料である。特に多く表面採集されているのが、渡連集落（11点）と須子茂集落（7点）である。表面採集された集落は、そのほとんどが外洋に面した集落で、前述した遺跡分布状況とも相違しない（第3図、第8図）。



第8図 瀬戸内町で確認されたゴホウラ資料（貝殻外面側） ※3）

2. 民俗資料

前述したが、加計呂麻島では、門柱上や屋敷敷地においてゴホウラを見かけることがある。そのほとんどが、門柱や外壁上に置いてあることを考えるとスズイガイ・クモガイ同様、魔除けの意味合いを持たせていると考えられる。これらゴホウラについて聞き取り調査を実施したが、方言名は確認できなかった。これは、日常生活の中で、食材や加工品などに利用することがない為、方言名が存在しないか消滅したのではないかと考えられる。しかし、加計呂麻島の東北側では、現在でも浅瀬でゴホウラを採取することが可能であり、生息していないということではない。実際、諸数集落などで採取した貝の中で、ゴホウラを確認することができた（写真4）



写真4 加計呂麻島にて採取される貝種



**民俗資料のゴホウラは
完形品**
※方言名は確認できていない

写真5 民俗資料としてのゴホウラ

なお、民俗資料として確認できたゴホウラの特徴として、完形品であることがあげられる。加工の痕跡が見られないだけでなく、ヘビガイなどの付着の痕跡も見当たらない。このことから、民俗資料としてのゴホウラ資料は、生きている貝を捕獲したものと考えられる。また、門柱だけでなく、油井岳の聖地である中オボツでもゴホウラが確認されている。「ナルコンミヤ」との記載がある資料※4)もあることから、この貝に何らかの呪術的な意味合いを持たせているものと思われる。しかし、聞き取り調査では、方言名が確認出来ないなど一般生活に密着している貝とは言い難い。

3. 発掘されたゴホウラ資料

加計呂麻島では、表面採集されたゴホウラ資料以外にも、発掘調査で確認されたゴホウラ資料が存在する。須子茂集落遺跡の発掘調査で出土した資料であるが、2点確認されている(写真6)。共伴遺物などから、弥生時代に相当する層から出土しており、時代的にも貝交易の時期に合致する。これらの資料は、2点とも荒加工がなされており、何らかの製品を作り出そうとしていたことが読み取れる。なお、2点ともにヘビガイなどの付着物の痕跡が認められ、貝が採集された時点ですでに死貝であった可能性が高い。このことは、ゴホウラ資料が単なる食糧残滓ではなく、たとえ死貝であっても価値のある貝であったことを裏付けている。また、宇検村の屋鈍遺跡の試掘調査でもゴホウラ資料が1点出土している。調



写真6 須子茂集落遺跡出土ゴホウラ

査者によると、出土したゴホウラ資料は、加工の痕跡があり、ヘビガイと思われる付着物が付いていたとのことであった。屋鈍遺跡の資料も、須子茂集落遺跡と同様に、死貝を利用した資料であると思われる。

なお、前述した表面採集のゴホウラ資料も28点中16点(約57%)が、ヘビガイなどの付着物の痕跡があり、死貝の状態で採集されていた可能性が高い。

奄美大島南部で確認されたゴホウラ資料を概観してみたが、奄美大島南部地域においてゴホウラ資料が少なからず確認されていることが理解できた。では、奄美大島南部で確認できるゴホウラ資料の特徴をまとめてみたい。



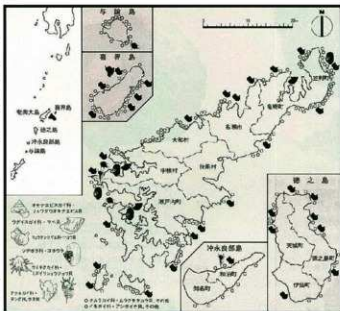
写真7 ゴホウラ腕輪二次加工品

- ①奄美大島南部(瀬戸内町)で表面採集されたゴホウラ資料は、9ヶ所28点存在し、そのほとんどが、加計呂麻島、請島、与路島の外洋側で確認されている。
- ②表面採集されたゴホウラ資料は、ほぼ全ての資料が何らかの加工を受けている。
- ③表面採集されたゴホウラ資料の6割近くが死貝であった可能性が高い。
- ④腕輪の二次加工品が西古見集落で表面採集されている(写真7)。
- ⑤民俗資料として、確認されるゴホウラ資料も少なからず存在し、聞き取り調査によると現在でも浅瀬で生貝を採取することが可能である(数量は多くなく、採取できる時期がある)。民俗資料のゴホウラ資料は、完形品(未加工、付着物無し)である。
- ⑥須子茂集落遺跡の確認調査で2点、屋鈍遺跡の試掘調査で1点のゴホウラ資料が確認されている。3点全て加工及び付着物の痕跡がある。死貝であった可能性が高い。

V 奄美大島南部におけるゴホウラ資料の検討と課題

以上、奄美大島南部特に瀬戸内町地区を中心に確認されたゴホウラ資料について状況を確認してみた。その結果、多くのゴホウラ資料を確認することができた。それでは、それらゴホウラ資料がどのような意味合いを持つ可能性があるのか、考察を行ってみたい。

まず、奄美大島南部地域が、現在でもゴホウラが採取できる地域であることが特徴として挙げられる(第9図)。南西諸島において、現在でもゴホウラを採取できる地域は少ないと考えられ、ゴホウラにとって生息しやすい環境であることが考えられる。



第9図 奄美群島、海産貝類分布図 ※5)

また、民俗事例として、門柱上や聖地などで確認される例があり、ゴホウラに対して何らかの呪術的な意味合いを持たせていると推測できる。前述した通り、一部資料で「ナルコレルコ」が容易

に想像できる「ナルコンミヤ」という名称の記載があり、やはり呪術的な意味合いが強いように思われるが、聞き取り調査においては、残念ながら方言名を確認することは出来なかった。現在では、普段の生活に密接に関わる貝では無いのが現状であろう。

また、表面採集ゴホウラ資料が、加計呂麻島、請島、与路島など外洋側に面した地域に多く確認されることも注目される。これらの地点は、貝の遠隔地交易の際に港としての役割を果たしていた可能性がある。大島海峡など奄美大島南部は、複雑なリアス式海岸であるため、水深の深い入江が多く、現在でも避難港として利用されている。今より未熟な航海術しか備えていない弥生時代相当期の人々にとって、これらの島々や大島海峡・湾は、格好の中継地・港であったと考えられる。このことは、先行研究の成果である、奄美群島の人々が中継交易を行っていた可能性とも関連するのではないかとと思われる。

なお、奄美大島南部で確認されたゴホウラ資料が死貝を多く含む点は、沖縄諸島の貝集積遺構において死貝が利用されていた点と共通している。奄美大島南部の発掘調査で確認されたゴホウラ資料も、すべて死貝であることから、何らかの目的を持って死貝を収集していたのではないかと考えられる。また、確認されたゴホウラ資料のほぼ全ての資料が何らかの加工の痕跡を残しており、これらの事実が「貝の道」との関連も考慮される。西古見集落で確認されたゴホウラ腕輪二次加工品についても同様の意味を持つであろう。

今回、奄美大島南部におけるゴホウラ資料の状況と検討を行ってみたが、近年の調査成果により予想以上のゴホウラ資料が存在することが確認できた。このことは、現在までの先行研究で確認されていない事実である。また、先行研究において奄美群島の人々が「貝の道」の中継交易の役割を担っていた可能性が示唆されているが、これまで奄美群島の遺跡の中でゴホウラ資料が大量に確認されることはなかった。今回、奄美大島南部において、これだけ多くのゴホウラ資料が採集されたことを考えると、今後、奄美大島南部において貝集積遺構が確認される可能性も捨て切れぬ。

おわりに

弥生時代に開始されたゴホウラを中心とした「貝の道」は、これまで沖縄諸島を中心に研究が進められてきた。

今回、奄美大島南部、特に瀬戸内町地区を中心に確認されたゴホウラ資料の状況を確認し、考察を行ってみた。その結果、今まで奄美大島南部地域で皆無と考えられていた弥生時代相当期の遺物とゴホウラ資料を確認することができた。ゴホウラ資料は、そのほとんどが表面採集資料であるが、ゴホウラ資料の採集状況から弥生時代の貝交易において、奄美大島南部地域の人々が何らかの形で関与している可能性が推測された。

しかしながら、奄美大島南部では発掘調査及び資料数が少なく、解決すべき問題は数多く存在する。こうした課題を解決していくには、地道に資料の蓄積を重ね、様々な視点から総合的に検討を進める必要がある。

貝交易では、奄美群島が重要な役割を果たしていたと考えられている。奄美大島南部の考古資料が蓄積され検討されることは、奄美大島南部地域のみだけでなく、弥生時代相当期の南西諸島の様相が明らかになる可能性を秘めている。

謝辞

本稿は、「平成 24 年度 琉球大学史学会奄美大会」の発表に、加筆・修正を加えたものである。

加工の痕跡	加工有		加工無		計
	有り	無し	有り	無し	
1 古仁屋	1	0	0	1	2
2 西古見集落	1	0	0	0	1
3 徳兵集落	1	0	0	0	1
4 安脚場集落	1	0	0	0	1
5 渡連集落	5	6	0	0	11
6 須子茂集落	5	2	0	0	7
7 諳阿室集落	1	0	0	0	1
8 池地集落	1	1	0	0	2
9 与路集落	1	1	0	0	2
表面採集資料合計	17	10	0	1	28
	27		1		
1 須子茂集落遺跡	2	0	0	0	2
2 屋鈍遺跡	1	0	0	0	1
発掘資料合計	3	0	0	0	3
	3		0		

表3 奄美大島南部において確認されたゴホウラ資料数

註

- 1) 木下尚子 2004 「南島と大和の貝交易」『考古資料大観 12』小学館 P.250
- 2) 木下尚子 1996 『南島貝文化の研究』法政大学出版局
- 3) 図面の池地（右資料）は、アツソデガイの可能性もある。須子茂集落の上部2点は、発掘調査出土品である。
- 4) 恵原義盛 1973 『奄美生活誌』木耳社 P.173
- 5) 名瀬市立奄美博物館 1990 『奄美博物館展示図録』 P.75

○執筆者紹介（執筆順）

鼎 丈太郎（瀬戸内町立図書館・郷土館 学芸員）

平成 25 年 3 月発行

瀬戸内町立図書館・郷土館 紀要 第 8 号

■発行 瀬戸内町立図書館・郷土館
〒894-1508
鹿児島県大島郡瀬戸内町古仁屋 1283-17
電話 0997-72-3799 Fax 0997-72-3999

■印刷 上野印刷
〒894-0006
鹿児島県奄美市名瀬小浜町 8-22
電話 0997-53-8039 Fax 0997-53-8059